

## 僕の家族の日常

岩本 貴一郎  
いわもと 貴いちろう

僕は最近、お母さんとけんかをしてばかりだ。ついつい言い返してしまうけど、お母さんがいうことは全て凶星で、結局最後は僕が泣いて終わる。

僕の家には、お母さんと僕しかいない。だから、2人だけの戦いだ。悔しいけれど、僕はまだ一回もお母さんに勝っていない。お母さんはすごく怖いし、すごく強い。

この前もお母さんといつものようにけんかをした。僕は、怒ったまま黙って家を飛び出して、塾に出かけた。

でも、その日は、お母さんの誕生日だった僕は、「誕生日なのに、なんでけんかしちゃったんだろう。」と悲しくなっていて、塾で泣いてしまった。僕はお母さんが大好きなのに、どうしていつも意地を張ってしまうのだろう。

お母さんの誕生日は、僕がお祝いをしてあげたかった。だから僕は、お母さんに花を買うことにした。一回もプレゼントをしたことがなかったから、すごく緊張したけど、近くのスーパーで、リンドウの花を買った。

「お母さんは、まだ怒っているかもしれない。」とドキドキしながら玄関のドアを開けて、「誕生日おめでとう。」と花を手渡した。

お母さんは、大声で笑って、僕の頭をなでてくれた。そして、花を家の一番目立つところに飾ってくれた。仲直りは大成功だった。その日、僕は何回もお母さんに「プレゼント嬉しい？」と聞いて、お母さんが喜んでることを確かめた。

そういうえば、いつもけんかをする気まずい空気になるけれど、「仲直りする？」と聞いてくるのはお母さんの方だった。お母さんは花を渡した時の僕と同じように、いつもドキドキしていたのかもしれない。

今日はお母さんがお休みの日だ。僕がいつものようにずっとゲームをしていたら、いつものように叱られた。「なんだよ。」と思いながら、作文を書こうと思ったけれど、なかなか書き始められなくて、お母さんは何をしているかなと気になった。

お母さんは、ベランダで、僕の上履きを洗っていた。外の暑さに顔が変になっていた。髪もぼさぼさだけど、いつものお母さんだ。

僕は涼しい部屋の中にいた。いつもなら、暑くて窓も開けたくないと思うけれど、今日は、窓を開けて、僕が使っている冷え冷えタオルをお母さんに渡した。お母さんは、「ありがとう。」と言って笑った。僕も、「上履きを洗ってくれてありがとう。」と言った。

お母さんがいつも僕のとりにいてくれるから、けんかがいっぱいできるんだ、その分たくさんありがとうも言えるはずだと気がついた。

そして、このありがとうの気持ちで作文に書こうと思った。でも、お母さんにこの作文を見られるのは少し恥ずかしいな。